

「赤土の国の、
小さな長距離ランナーたち」

く
ラ
オ
ス
の
幼
稚
園
に
て
く

増
田
明
美

撮影 鬼室 黎



Plan
プランジャパン

懐かしい、初めての国へ

人生の長距離ランナーたちへ

赤土が付いたランニングシューズを洗えない。
そこに感慨深いラオスでの時間が詰まっているからだ。
花びらのような女の子の笑顔、勢い良く駆け出す裸
足の男の子。

国際NGOプラン・ジャバンの評議員として、ラオ
スを訪れた。

滞在したのは北部のボケオ県で最も貧しいといわれ
るパーウドム郡。

ここで、子どもたちはどんな夢を抱いているのか。
大人たちは、何を見つめて暮らしているのか。それ
を知りたいと思ったから。

赤土の道をよく走った。

朝焼けに赤土が一層赤く染まる道を、農作業に向か
う親子が歩いていく。

最後尾を歩く小学生くらいの子どもの前を子豚が横
切り、ヤギの親子とすれ違った。

早苗が風に揺れる田園風景、田んぼのあぜ道を鶏や
カモがぞろぞろと行進している。

人間も動物もみんな一緒に暮らしている自然な姿が
心地良く、何となく懐かしい気持ちがいま上ってきた。

「豊かなこと＝幸せ」ではないし、「貧しいこと＝不
幸」ではない。
前を向いて、昨日よりも今日、今日よりも明日と、
一歩一歩着実に前進する喜びを噛みしめられる人が
幸せではないだろうか。

私たちは、時に伴走しながら声援を送ったり、給水
を手渡してあげたり、自分のできる範囲で、色々な
カタチで人生の長距離ランナーたちを応援したい。

「村の担い手の卵たち」に出会う

滞在先となったのはパウナム郡の中心部にあるプランの活動拠点。この辺りはセントラルと呼ばれ、郡の中で最も発展した地域。ただ、ほとんどの家は竹の皮で編んだ壁に草葺の屋根、まるで弥生時代の高床式住居のよう。道路沿いの家々には電気が灯り、バイクの往来も多い。

到着した夜、少し離れたピアンカム村へ。街灯一つない暗闇の道を進むと、突然明るく照らされた草の広場に出た。そこには二百人ほどの群衆が座っていた。村のボランティアが「公衆衛生」を伝える人形劇を上演しているのだ。

裸電球に無数の虫が飛び、私たちの席に「いらっしやい」というようにバツタやコオロギがびよんびよんと現れた。

最初は人前で話すこともためらったボランティアを、プランの現

地スタッフが根気強く指導したそうだ。

この日は「手を洗う」「川の水を飲まない」というメッセージを伝える劇だった。歌も加わり、とても分かりやすく面白。ストーリーの検討から始まり、人形も舞台背景も全て手作りとのこと。

啓発活動というのは、まず集まってもらう努力から始まり、観客に「来て良かった」「明日から実行したい」と思ってもらおう、この日のような地道な活動の積み重ねなのだと感じた。

おばあちゃん
のひざの上の幼
い子も、手をつ
ないでいる姉妹
も、舞台を見つ
める子どもたちの
目が星空のように
煌めいていた。



村の幼稚園は、未来につながっている

赤土の幹線道路沿いのパクハー村の小学校には広い校庭に柵がめぐらされていた。小学校の隣には新学期（九月）を待つ、真新しい幼稚園があった。プラン・ジャパンの支援で建てられたものだが、何から何まで支援に頼っているわけではなかった。園舎の建材の一部は村で集めた物が使われている。そして、校庭を囲む柵は村の皆で自発的に作ったそうだ。

校庭の柵の場合、プランの役割はコミュニティの力を引き出すことだった。プランのスタッフ呼びかけ、村の大人たちが集まってもらい、村の問題点を皆で話し合った。十五歳の少年から「校庭は草が茂っていて、しかも牛の糞だらけで遊べない」と意見が。すぐに大人たちが草を刈り、材料を持ち寄り、牛が入らないように柵を作ったのだ。

お金や物の支援だけではなく、自立を助けていく。それは目に見えにくいことだが、未来の力につながる大切なことだ。

夏休みが終わり、校庭に子どもたちが走り回る歓声が響く日に思いを馳せた。



少数民族の子どもたちと走って、

笑って、雨宿り



神様は優しい。子どもたちと走り終わった途端、激しいスコールに見舞われた。校舎の軒先で肩を寄せ合いながらの雨宿り。お互いの、体と心の距離が近くなる。程なく雨が上がると、記念の植樹をした。三人の女の子と一緒に水を注いだ。数年後にはこの木もこの子たちも立派に育っていることだろう。



イー（こんちには）」と両手を合わせて挨拶をしたが、子どもたちは表情を和らげず、なかなか打ち解けてくれない。



足元を見ると、裸足の子どもが多い。小さな子どもが泣いた。すぐ隣の少し大きな子がその子の肩に手を回してなだめる姿が印象的だった。

「あの坂の上まで走ろうか」

みんなで赤土の道を走った。するとさっきまでとは打って変わり、走りながらずっと笑顔を私に向ける子や、折り返す前にギュッと私の手を握る子等々、とてもフレンドリー。改めて、スポーツは言葉以上に心を通わせるいいものだと感じた。

中心部から車で二十分ほどのモクソ村へ。ここにも小学校の校庭脇にプラン・ジャパンの支援で建てられた新しい幼稚園があった。白く四角い可愛らしい園舎。なぜ幼稚園かというのと、小学校では公用語のラオ語で授業が行われるが、山間の村々では民族独自の言葉を話すため、理解できずに小学校を一年で辞めてしまう子どもが多い。そこで幼稚園でラオ語にふれて、小学校へつなげるための準備をするというわけだ。

約二百人の児童・園児が園舎の前の草むらに並んで私を待っていてくれた。どの子どもも珍しい物を見るような目でこちらを見つめる。「サバイデ



電気のない村の、お母さんの決意

モクソ村よりも更に車で二十分ほど山奥、モン族の住むタンパケ村へ。赤土の道には電柱も電線も見当たらない。そこでは全く電気のない生活を送っていた。

民族衣装での歓迎を受けた後、プランの奨学金を受け学校へ通っている子の住む家にお邪魔した。

草ぶきで竹の壁、床はなく、広さ十二畳ほどの土のスペースに家族十人が暮らしていた。薪で料理

する台所には大きな鍋がひとつ。食器も数えるほどしかない。洋服はビニール袋に入れた壁に吊るしてある。



十二歳の長女のパジョンちゃんはこの七月に小学校を卒業し、九月からは中学校へ進む。

「将来は看護師になりたい」と目を輝かせた。

農業が唯一の産業であるこの村では、子どもも重要な働き手だ。彼女のお母さんは凛とした美しい人で、自分は学校に行けなかったので字も読めないし、農業しかできないと話した。

「子どもたちには学校で勉強して、いろんな仕事に就いて欲しい。私は一人で畑に出てもいい」と。

彼女のようなお母さんが増えれば、この村の教育は変わる。家族の笑顔が、電気のない薄暗い部屋に眩しかった。





Profile

● 増田 明美 ● Masuda Akemi

スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授、文部科学省中央教育審議会委員。1964年、千葉県生まれ。成田高校在学中、長距離種目で次々に日本記録を樹立。1984年のロス五輪に出場。1992年に引退するまでの13年間に日本最高記録12回、世界最高記録2回更新という記録を残す。2007年、初小説「カゼヲキル」(全3巻、講談社)を出版。2008年10月、プラン・ジャパンの評議員(無給のボランティアで)に就任。また、プラン・ジャパンのスポンサーとして、インドネシアの女の子、インドの男の子と交流している。



■ プラン・ジャパンとは

国連に公認・登録された国際NGOプラン(本部:イギリス)の一人。アジア・アフリカ・中南米の48カ国で、学校建設、予防接種、職業訓練など、子どもたちの能力と可能性を育む活動を行っています。スポンサーと呼ばれる支援者は全国に約5万人。月々の支援金で活動を支えながら、活動地域の子ども(チャイルド)と手紙などで交流しています。

公益財団法人プラン・ジャパン

〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22
 サンタワーズセンタービル11階
 TEL 03-5481-0030 FAX 03-5481-6200
www.plan-japan.org

■ ラオスでのプランの活動

ラオスでは、5歳の誕生日を迎えることのできない子どもは1,000人中61人(日本は4人)。子どもの約40%が栄養不良とされています。小学校就学率は男女ともに80%台という統計があるものの、少数民族が多く暮らす北部ボケオ県では、女の子の約半数が小学校に通っていません。プランは2008年に同地での活動を開始。初等教育、そして幼児教育に力を入れています。中国やタイからのハイウェイ建設が進むこの地域で、都市への流入、麻薬、人身売買などの新しい動きや危険から子どもたちを守るのは、彼ら自身が身につけた教育に他ならないからです。また、栄養や衛生状態の改善にも取り組んでいます。

